

タイトル:平成 19(2007)年度 教育セミナー

日時:平成 19 年 9 月 18 日(火)～21 日(金)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

新井 春美(拓殖大学大学院国際協力学研究科安全保障専攻)

「中東・イスラーム教育セミナー」には、単に面白そうだという軽い気持ちから応募してみたものの、開催日が近づくにつれ不安になっていきました。というのも、私の専攻は安全保障であり対象はアメリカの戦略におけるトルコだったため、トルコは中東とはいうけれど、しかもイスラームとなると、他の受講者のテーマとはあまりにも違いすぎるのではないかと、という疑問が頭の中を渦巻いていたのです。さらに事前にお送りいただいた発表者のレジюмеを見ては、みんなイスラームに関して専門的で密な研究をしているなど、落ち込んだものでした。

しかしそれらは全くの杞憂に終わりました。普段、研究対象として「国家」を扱っているため、思想、文学作品、個人レベルでの宗教とのかかわりといった人間の顔が見えるテーマは非常に興味深く新鮮でした。また専門外の分野であっても、理解しコメントする力量が必要だという受講生の感想に納得したものでした。

私は長年にわたるOL生活を辞め、大学院に進学しました。酒井先生のお話には、どんな仕事でも壁があるのは同じだと思うと同時に、今後ぶち当るであろう「研究者としての存在意義」という疑問に対し自分なりに回答を出し、自分のファインディングを正しいと信じ続ける覚悟を改めてした次第です。

受講生、講師陣がスムーズにコミュニケーションをとれるよう細かい点まで配慮していただき、時には時間をオーバーするほど熱い議論があり、久々に知的興奮を味わいました。最終日に大塚先生より手渡ししていただいた修了証書は、新しいスタートを切ったという証として、自分への励ましとして大事にしていきたいと思います。

今後は政治分野専攻の受講者が増えるようにPRを行っていただければいいなと思います。

先生方、スタッフ、受講生のみなさま、素晴らしい 4 日間をありがとうございました。
心より感謝いたします。

生田 篤(九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻修士課程)

東京外国語大学で行われてきた本セミナーについては、学部生の時から話を伺っており、以前から関心を持っていた。加えて今年五月の日本中東学会へ行った際に、セミナーへのお誘いを頂いたこともあり参加を決意した。当日の朝に福岡を発ったのだが、途中電車が止まるアクシデントがあり、開始時刻よりも少し遅れて到着した。そのようなアクシデントを経たものの、9月18日から21日までの4日間、大変有意義な時間を過ごすことができた。

セミナーに出たことで、私は以下の二点において大きな刺激を受けた。第一点は、参加者の中に、私と同じパレスチナを研究対象としている方が二人もいたことである。九州では同じ地域を研究している方と知り合うことができなかった私にとっては、それだけでも一つの収穫であった。熊本氏にいたっては四日目に発表を行っていた。彼らの姿勢を見て敬意を抱くと同時に、これからはより一層強い克己心をもって研究しなければならないという自省の念にも駆られた。

第二点は、4日間の発表内容が対象地域・ディシプリン両方の面で多岐にわたっていたことである。成果の一つとしては最近の研究動向の一端を知ることができた。また私の勉強不足も原因だが、情報面で驚かされることが少なくなかった。特に受講生発表の時に自らの無知を思い知らされた。一方、先生方による6つのセミナーでは、地域やディシプリンを越えた問題関心というものに注目しつつ話を聞いた。

例えば、最後の酒井先生の発表は、先生が研究者として直面した「ディスコミュニケーション」という名の限界についてであった。その限界は9・11からイラク戦争を経た今の時代を生きる我々にとって共通する問題であった。酒井先生は内容に関して、参加者を「ディスカレッジ」するだろうという趣旨の発言をされていた。しかし、私は先生の発表によって研究をすることの意義を前向きに捉え直すことができた。他の先生が言われたように、私もまた「エンカレッジ」されたのである。

本プロジェクトは五年で一区切りになるため、来年と再来年は確実に行われる。そのうち最低でも一回は発表を行いたい。先程述べた受講生の研究発表を振り返っても、発表をした方が得るものは大きいと感じたからである。また今年度は発表時に数えるほどしか質問できなかったのも、その点は大いに反省して次回において改善したい。

末筆ながら、今回のセミナーを運営して下さった先生方・スタッフの皆様に厚くお礼申し上げます。

稲光 康平(九州大学大学院人文科学府イスラム文明史学専修修士課程)

9月18日から21日の4日間にわたっておこなわれた中東・イスラーム教育セミナーは私にとって大変有意義で刺激的なものであった。以下、今回のセミナーに参加した私の感想を述べさせていただきますと思う。

今回は先生方による6つのセミナーと受講生の方々による4つの発表によって構成されていた。これらのセミナーおよび発表は「中東・イスラーム」という名にふさわしく、対象とする地域が多岐にわたり、もちろん内容も非常に興味深いものばかりであった。ただ、あえて苦言を呈するならば、近現代をテーマとするものがほとんどだったので、空間の幅だけでなく時間の幅を加えていただければ非常にありがたかったと思う。

今回のセミナーにおける最大の収穫は、イスラームを研究するたくさんの同輩と出会えたことであつたと思っている。九州大学に在籍する私には、私と同世代のイスラーム研究者と接する機会が極めて少ない。それだけに、今回のセミナーは私にとって非常に刺激的であつた。朝から夕方まで、一日中、時間さえあれば、自らの研究のことやその他様々なことを議論し、情報を交換する。そして、各分野において最先端を走る大先生方のセミナーを聴いては議論を交わす。これほど贅沢な時間はない。自らの専門分野以外における知識の浅さを痛感する一方で、「幅広い知識を得なくてはならない」否、「もっと知りたい」という知的欲求を掻き立てられる4日間であつた。私は大征服時代のエジプトをテーマに研究をおこなっているのだが、今回のセミナーでは先生方、受講生の方々ともに近現代をテーマにされている方が多かったように思われた。しかし、その中で様々な研究手法や視点、さらにはタームの使い方など普段一人で研究しては気づかないようなことを勉強させていただき、自らの視野を広げる最高の機会になったと思っている。

このセミナーで学ばせていただいた多くのことは、今後の自身の研究の中で活かしていきたい。そして、今回の様々な人との出会いを今回だけのものにするのではなく、このつながりを今後も大切に、これからも情報を交換し、互いに刺激し合っていきたいと考えている。

最後に、お世話になった先生方、ともに受講した院生の方々、またこのセミナーに関与した全ての方に心から感謝の意を表したいと思う。どうもありがとうございました。

井上 祐花(法政大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程)

本教育セミナーに参加させていただき、私は多くの知識や経験を得ることができたと感じている。それは、特に以下の点においてである。

まず、本セミナーの対象範囲が中東に限られておらず、イスラームを扱う地域であればすべて含まれている点である。私の行っている研究は中東のなかのある地域で、そこに住む住民の大半がムスリムである。このような場合、イスラームという関連はあってもなかなか東南アジアや他のムスリムの住む地域について議論を交わす場は持ちにくい環境にあった。そのような中で今回のセミナーでは、中東に限らず、他の地域におけるムスリムの抱える問題を議論でき、またそれを通し自分の研究にも比較反映させることができた。このことは意義深いものであった。

次に、学問的な興味や対象が似ている人々との交流の場としての点である。中東やイスラームは、日本において相対的に研究者が少ないフィールドである。そのような環境のなか同世代の人々と関心や悩みを共有できることは、私自身、また多くの参加者にとり多くの意味があったのではないだろうか。特に、イスラームとは一言では語ることのできない宗教であり、自身の研究対象にならない宗派や地域についての議論ができたことは大きな刺激となった。

ただ、一点のみ要望を挙げるならば日程についてである。今年度は9月18日から21日までの4日間であったが、私の所属する大学院の後期授業が重なってしまい授業を休まざるを得なかった。なので、もう少し早い時期に開講して下さると今後、より多くの学生が受講しやすくなるのではないかと思う。

4日間という短い期間ではあったが、本セミナーは多くの刺激を受けることのできる大変有意義な時間であった。今後もより多くの学生の活発な議論が交わされる場となることを期待したい。

最後に、講義をしてくださった諸先生方、また事務作業をしてくださった皆様に厚く御礼申し上げます。

梶田 知子(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程)

今セミナーに参加して、「中東・イスラーム」というフィールドの広大さと、その研究方法、すなわち学問分野の多様さを再確認することができた。

「中東・イスラーム」という研究範囲は、日本・世界で行われている研究全体の中では狭いかもしれないが、研究テーマは本当に多様である。私はフィールドをエジプトに限定して研究しているが、イランや東南アジアなど他地域をフィールドとする研究者の報告を聞くことができ、各々の地域の共通性や相違性を見出すチャンスとなった。その一つの例として、「近代」「近代国家」が多くのセミナーや受講者発表でテーマとなっていた。現在「中東・イスラーム」の持つ共通する課題の1つは、「近代国家」という枠組みへの対応にあるようである。

また、講師の先生方に各学問分野の持つ課題を生々しく語っていただいたことは、研究者を志す者にとってかけがえのない体験になった。講師の研究方法は多彩で、研究者の数だけ研究方法があることを目の当たりすることができた。研究者は、自ら研究方法を開発していく。その努力を垣間見たことで、研究を続けることに対する不安が和らぎ、「研究をすること」がどういうことなのか、が以前よりも明確になったように思う。大先輩である講師の先生方だけでなく、同じ志を持つ受講生仲間に出会えたことは、かけがえのない経験となった。日ごろは一人で行動することの多い院生にとって、研究仲間を得る機会は貴重であったと思う。

現在、欧米におけるイスラーム教徒の研究が盛んに行われるようになっており、今後、教育セミナーには欧米をフィールドとした研究者の参加も予想される。「中東・イスラーム」という研究テーマが多彩さを増していくなかで、このセミナーはどのように形を変えていくのだろうか。「中東・イスラーム」と銘打つことの意味・目的が問われてくるのではないだろうか。

受講者にとって、このセミナーは研究の一通過点である。自らの反省点を含めて、今セミナーで得たことを活かしながら、今後の研究に精進していきたい。

河村 有介(京都大学大学院法学研究科法政理論専攻)

この度、東京外国語大学にて行われた中東・イスラーム教育セミナーに参加させていただき、有意義な時間を過ごせたと思う。以下に、簡単ながら本セミナーの感想を記したい。

私は自らの所属の関係上、中東地域を専門とする研究者や院生と交流する機会が少ない。そのため本セミナーのように、自分と研究対象地域や問題関心を共有する先生方や院生に出会えたことが最も重要であった。さまざまな学問領域における第一線の研究者の方々の講義を聴けたのは、とても重要な機会であった。また、同じような地域を対象として研究しようとしている院生と交流を持てたこともよかったと思う。半ば公式行事のように毎晩開催された飲み会も、研究者の方々に気軽に話を伺えたという点で、本セミナーの重要な存在であったと思う。

また、先生方の講義を聴き、院生とさまざまな形で交流をしていくうちに、自分の視野の狭さや知識の少なさを実感できた点も重要である。本セミナーへの参加によって、改めて勉強しなおすモチベーションを持つことができた。

以上のように、本セミナーは非常に満足するものであった。しかしながら、本セミナーに参加して私が抱いた不満を最後に述べたいと思う。本セミナーが学際的・地域横断的なものであることには、メリットがある一方でデメリットも存在すると思う。そのデメリットというのは、先生方の講義を聞いていて、その前提となっている研究の方法論や周辺知識が分からないため、理解が困難な部分があることである。確かに自分の知識不足が原因であることも否めないものの、学際的な本セミナーでは、当然に存在すると思う。それゆえ、各々の学問分野において研究をする上で前提とされている方法論や先行研究、また研究上必要とされる先行研究の紹介をする講座をプログラムに加えていただきたかった。

末筆ながら、本セミナーに参加する機会を提供していただき、また運営に尽力して下さった AA 研のスタッフの皆様に謝意を示したい。

竹村 和朗(平成 17 年 6 月カイロ・アメリカン大学人文社会科学部社会学・人類学・心理学・エジプト学科社会学・人類学専攻修士課程修了)

2007 年 9 月 21 日から四日間、本セミナーに参加させていただきました。中央線のダイヤの乱れがあったり、外語大キャンパスが遠くて朝がきつかったりと予想外のこともありましたが、有意義な時間を過ごさせていただきました。関係者の方々、どうもありがとうございました。以下、セミナー参加の報告です。

本セミナーの一番の特徴は、担当スタッフおよび受講生の学問的背景の多様さであろう。同じ「中東」とはいえ、地理的にはモロッコからトルコ、エジプトやパレスチナ、イランと幅広く、時間的にも現代研究から近代や中世などの歴史研究までを含む。また「イスラーム」を繋がりにして、東南アジアの研究者もみられた。分野も、歴史学や政治学、人類学や思想研究、イスラーム法学、文学など様々である。

そこから得られるものは何だろうか。まず、他の学問分野、自分の研究対象ではない地域について改めて学ぶ機会となることが挙げられる。自分自身、現代エジプトを研究するためには近代史の理解が不可欠と思っていたところであったので、トルコやイランの近代史に関わる発表を改めて聞くことができよかった。エジプトについても、19 世紀後半に起きた「法の近代化」を扱った堀井氏の発表では、通常の歴史叙述とは異なる法学独自の議論の組み立て方が興味深かった。また、特に立憲革命期イランのウラマーに関する先行研究をまとめた受講生の遠藤氏の発表からは、研究のオリジナリティは先行研究の丁寧なまとめから生まれるという、研究の基本姿勢を改めて教えられた。大塚氏の発表からは、他分野の専門家を前にしたときの人類学者の発表方法について学ぶことができた。政治学の見市氏、光成氏の発表では、現地の資料が広範に収集・整理されており、同じ現代研究として大変参考になった。

セミナーで出会うのは知識だけでなく、勿論そこには「人」がいる。学部や大学、ディシプリンの垣根を超えた、普段は交流する機会の少ない人たちとの出会いも貴重である。エジプトを研究対象にしている者にとって、イランやトルコ、パレスチナやマグレブ諸国の研究者・学生と知り合う機会は案外少ない。いわんや東南アジア、である。また本セミナーには、九州や京都など関東圏以外からの参加者もいて、修士から博士、あるいは現在は大学に所属していない者も参加している。出会いの意外さ、面白さは、確かにある。

こうして他分野の知識に接し、他地域の専門家たちと交流する中で、自分の持っている知識や方法論の強みと限界について考えさせられた。自らの立ち位置の再確認を迫られた、ともいえるだろう。ある地域、ある国を研究する際に、まずは、自分が今まで考えてきたやり方だけでなく、他にも色々なアプローチがあることを認識する。その上で、自身の研究の利点や良さを主張し、磨き上げていく必要性を改めて感じた。

ということで、研究に踏み出したばかりの修士の方、修士論文をなんとかまとめたばかり博士の方にとって、とても有意義な時間・場になると思います。みなさん(企画が続いているうちに)、ぜひぜひ参加してみてください。

田中 知樹(慶應義塾大学文学研究科東洋史専攻前期博士課程)

セミナーに参加させていただき、この四日間は自分にとって大変刺激になった貴重な時間となった。そのいくつかをここに記すことで、今一度セミナーの総括として振り返りたいと思う。

まず講師の先生方の講義に関して、それぞれの先生方のお話は地域、時代ともに多岐にわたっており、受講生の興味や研究範囲に可能な限り応えようという配慮がなされていた。お話が多岐にわたっていた故に、私の知識不足もあいまって、自分の研究範囲と異なる分野の先生方のお話はやはり少々難解に思われ、ついていくのが精一杯という状況にもしばしば陥った。しかしながら、一方で異なる分野であるからこそ、初めて見た先生方の研究の手法は私にとって斬新で、自分の研究に何かを結びつけようという視点で聴講しようと努めたことで、今後自分の研究にも新しい風を呼び込むことができるのではないかと感じている。

このセミナーにおいて私が最も考えさせられた問題は、地域や時代という枠を超えて私達全員が常に心の中に置いておかなければならないであろう、すなわち言葉の使い方という問題に関してであった。受講生の発表において、何の気なしに便利であるから、あるいはもっともそうであるからと使われたタームに対しての先生方のご指摘は、私には何が誤っているかすらも気づくことができなかったという反省と、今後自分の修論で使うであろう言葉には、否が応でも多大な責任が付きまとっていくのだという自覚とを、荒々しく覚醒させることとなった(例えば、「大衆」などがそうであった)。その語の成立に関する歴史的な背景を知っていなければおよそ使いこなすことができないようなタームと、歴史学を志すすべての者は向かい合っていかなければならない。そして、おそらく自分の研究範囲外の書物を読んでいるだけではこのような語を使いこなせるようにはならないのである。言葉には必ず成立するにあたってその背景がある。私は、このような責任を伴う言葉を使う代わりに、他の言葉を回りくどく使って表現したいことの焦点をあやふやにするような論文は書きたくはない。幅広い知識を身につけ、言葉を正確に用いることの重要性を自覚して、常に推敲を怠ることなく修論にとり組んでいきたいと、このセミナーでは自分の決意を新たにすることができた。

細内 恵子(荒川区立町屋図書館;平成 16 年 3 月、立教大学大学院文学研究科修士課程修了)

9 月 18 日～9 月 21 日までの 4 日間「中東・イスラーム教育セミナー」が行われた。初日を迎えるまでの数ヶ月、報告をする訳でもないのに徐々に緊張が高まっていた。大学院を出てから3年が経っており、みなさんの報告についていけるか、質疑応答に加われるか、不安をあげれば切がなかった。そもそも修士のときも、うまく議論に加われた覚えがない。とにかく、あらかじめ配られた報告者のレジメを読んで、時代背景を調べなおす事くらいしかできなかった。しかし、そんな緊張はすぐに吹き飛ばすほど、研究意欲を刺激する活気のあるセミナーであった。

このセミナーでは、イスラーム研究に携わる者が集まったわけだが、「イスラーム」が表す範囲と同じく、受講生と先生方の研究対象は実に多様である。時代はイスラームの初期から現代まで、地域は中東のみならず、東南アジアやアフリカにも話が及んだ。分野も歴史学、文化人類学、法学、政治学と多岐にわたるため、自らの知識の少なさに愕然とし、急いで本を探すこととなった。

また、専門が違う人たちが集まるからこそ、発表や研究の手法についても学べたことは大きかった。例えば、言葉の定義である。言葉を慎重に使うよう、よく指摘されてきたが、ゼミの発表ではその必要性を忘れがちになっていた。今回のように、初めて顔をあわせ、専門を異にする研究の報告を聞くと、言葉のひとつひとつを定義しなければ、ひどく曖昧なものになってしまうことを再認識できた。そしてイスラームを多角的に見たことで、自らの研究対象も史料だけでなく、考古学や法学などを絡めたアプローチを考えさせられたことは大きな収穫である。また、研究者に何ができるのか、社会にどう還元していけるのか、というお話もあり、最後まで充実した4日間であった。

大学の中だけではイスラーム研究に携わる同志を見つけにくく、他の受講生も似たような環境だと言っていた。そんな中、このようなセミナーを開いていただいたことは、とても有難く、有意義なものであった。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった先生方、スタッフのみなさんに感謝いたします。

松本 隆志(中央大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程)

私は4日間のセミナーの内、事情により前半2日間しか参加できなかった。そのため以下の感想は参加した2日間のみのものであることを最初にお断りしておきたい。

全日程の半分しか参加できず、特に後半に組まれていた学生の皆さんの研究発表にまったく参加できなかったことは非常に残念なことであった。だが同時に、参加できた2日間は私にとって充実したものであった。

初日は林先生がオスマン帝国史の研究史について、2日目は堀井先生がエジプト民法の成立状況について、黒田先生が近代イランの社会運動史について、それぞれ述べられた。私はいずれのテーマについても概説書程度、ないしはそれ以下の知識しか持ち合わせておらず、自分の不明を痛感するとともに、興味深く聴かせていただいた。以上の講義を私なりに分類してみると、林先生と黒田先生の講義は研究史の紹介を含めた概説的な内容であり、堀井先生の講義は現在御自身が取り組んでおられるテーマの序説的な内容であった。

以下、私の感じたところを述べたい。本セミナーのような、専門とする領域が多様な学生たちに対して講義をする場合、何をどの程度まで話すか、という問いが付いて回るものであろうかと思われる。つまりは専門性と概説性のバランスの取り方ということになるであろう。そして講義に参加する学生の側にも、やはり問いが生じる。すなわち、講義に対して何を求めればよいのか、いかなる準備で臨めばよいのか、という問いである。これは普遍的な解答など望むべくもない問いではあるが、本セミナーが何を教育するセミナーなのかという問いへと繋がるように思われる。講師陣と各講義題目以外にも、いかなる性質の講義がおこなわれるのかを事前に明示していただけると、より有益なセミナーとなるのではないだろうか。

また私としては、もっと専門的な内容でもよかったのではないかと感じた。より専門性が高い内容になればなるほど講義自体はシンプルな構造になるであろう。問題意識の所在がどこにあり、いかなる手法を選択して議論を進め、どのような成果を導き出したのか。こうした骨子が明確になり、結果として講義後の質疑も学生が参加しやすくなるのではないかとと思われる。専門知識に関しては事前に参考文献やキーワードを提示しておいていただければ、専門外の学生も準備して臨めるであろう。

以上、稚拙ながら私が感じたところを述べさせていただいた。

最後に、毎日おこなわれていた飲み会について(少なくとも私が参加した2日間は連夜飲んでいった)。外大の先生方のフランクな雰囲気のためか、和やかであると同時に、刺激の多い場であった。そもそも学生に比して教員の割合が高いためか、座って参加しているだけで研究やこの業界に関する様々なお話を聞けた(初日の夜は気付いたら学生は私だけだった)。この点でも、2日間しか参加できなかったことが大いに悔やまれる次第である。

山口 ちひろ(上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科国際関係論専攻)

私の専門分野はイスラームではなく、場合によってはイスラームの知識が必要になるからと、その位の考えで参加した今回のセミナーであった。だから、専門的な内容に話が及ぶと専門家集団に太刀打ちできるはずはなく、この分野に対する知識の不十分さを痛感させられた。

しかし、このセミナーにおいては、専門知識のみならず、多くのものを得る機会に恵まれたと思う。

その一点目として、先生方の講義の中で、研究に対する考え方や心構え、また方法論などに対する示唆を与えてくださるような内容が盛り込まれていたことが挙げられる。今後、自分なりの研究を進めていく上での参考となった。また、自分が発表することはかなわなかったが、研究発表に対するコメントも同様に、他人の発表とはいえ、わが身に引き合わせて考えるべき研究上の問題などに気づかされた。

また、「中東・イスラーム」という共通点を持つものの、それぞれ異なったディシプリンを持った方たちとの交流を持つことができたと言うことを二点目に挙げるべきだろう。

普段自分が慣れ親しんでいるのとは異なった方法論によって積み重ねられた研究発表を聞くことは、自分の研究に対しても新たな視点を発見するきっかけとなった。内容のみならず、日本全国で様々な研究を行っている人々との交流というのは、自分の研究室に籠りがちな院生にとって必要なものであると感じた。

申し込み当初考えていたテーマと、現在持っている研究関心領域との間に若干のずれが生じており、その為今回のセミナー参加についても直前まで迷っていたが、結果的には得るものの多い充実した4日間であった。

このような機会を与えてくださった先生方、またスタッフの皆様に感謝したい。